

お詫びと訂正

このたびは、BladeSymphony(以下 システム装置)をお買い求めいただき、誠にありがとうございます。ごさいます。「ユーザーズガイド(第 22 版)」、「ソフトウェアガイド(第 22 版)」に訂正箇所があります。謹んでお詫び申し上げます。

■ ユーザーズガイド

・「はじめに」「お問い合わせ先」(P.xi)

誤	<p>□ 困ったときは</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 マニュアルをご参照ください。 『ユーザーズガイド』(本書)の「10 困ったときには」P.1011 をご参照ください。また、製品同梱のほかの紙マニュアルもご利用ください。 2 電話でお問い合わせください。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ 販売会社からご購入いただいた場合 販売会社で修理を承ることがございます。お買い求め先へ修理の窓口をご確認ください。 ◆ 上記以外の場合 日立ソリューションサポートセンタへお問い合わせください。
正	<p>□ 困ったときは</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 マニュアルをご参照ください。 『ユーザーズガイド』(本書)の「10 困ったときには」P.1011 をご参照ください。また、製品同梱のほかの紙マニュアルもご利用ください。 2 電話でお問い合わせください。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ 販売会社からご購入いただいた場合 販売会社で修理を承ることがございます。お買い求め先へ修理の窓口をご確認ください。 ◆ 上記以外の場合 <ul style="list-style-type: none"> ・ サポートサービス契約済の場合 契約時にご連絡している修理窓口へお問い合わせください。 (無償保証期間中であってもサポートサービス契約済の場合は、契約時にご連絡している修理窓口へお問い合わせください。) ・ 無償保証期間中の修理受付窓口 日立ソリューションサポートセンタの以下の連絡先へお問い合わせください。 フリーダイヤル:0120-366-056



EMA0009168-B

・「はじめに」「お問い合わせ先」(P.xi)

誤	<ul style="list-style-type: none">■ 日立ソリューションサポートセンター<ul style="list-style-type: none">◆ BladeSymphony サポートサービス <p>フリーダイヤル: サポートサービス契約の締結後、別途ご連絡いたします。 詳細は担当営業へお問い合わせください。</p> <p>受付時間 : 8:00 ~ 19:00 (土・日・祝日・年末年始を除く)</p>
正	<ul style="list-style-type: none">□ 日立ソリューションサポートセンター<ul style="list-style-type: none">◆ BladeSymphony サポートサービス <p>フリーダイヤル: サポートサービス契約の締結後、別途ご連絡いたします。 詳細は担当営業へお問い合わせください。</p> <p>受付時間 : 8:00 ~ 19:00 (土・日・祝日・年末年始を除く)</p>

・「はじめに」「ハードウェアサポートサービス」(P.xi)

誤	<h2 style="text-align: center;">ハードウェアサポートサービス</h2> <p>システム装置を最適な状態でお使いいただくためのサポートサービスについて説明します。</p> <ul style="list-style-type: none">□ サポートサービスについて <p>システム装置をご購入いただいた日から1 年間は、無償保守を行います。 保証書は紛失しないよう、大切に保管してください。</p> <table border="1"><tr><td>無償修理期間</td><td>ご購入日より1 年間 *1</td></tr><tr><td>サービス内容</td><td>障害時サービス員が即時出張による修復(無償)</td></tr><tr><td>サービス時間</td><td>平日9:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)</td></tr><tr><td>対象製品</td><td>BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)</td></tr></table> <p>*1 使用期間により寿命となる有寿命部品についての交換は有償となります。 *2 BladeSymphony 専用外付けオプションに関しては、無償修理期間はご購入日より1 年間となります。</p>	無償修理期間	ご購入日より1 年間 *1	サービス内容	障害時サービス員が即時出張による修復(無償)	サービス時間	平日9:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)	対象製品	BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)
無償修理期間	ご購入日より1 年間 *1								
サービス内容	障害時サービス員が即時出張による修復(無償)								
サービス時間	平日9:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)								
対象製品	BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)								
正	<h2 style="text-align: center;">ハードウェア保守サービス</h2> <p>システム装置を最適な状態でお使いいただくための保守サービスについて説明します。</p> <ul style="list-style-type: none">□ 無償保証について <p>システム装置をご購入いただいた日から1 年間は、無償保守を行います。 保証書は紛失しないよう、大切に保管してください。</p> <table border="1"><tr><td>無償保証期間</td><td>ご購入日より1 年間 *1</td></tr><tr><td>サービス内容</td><td>障害時サービス員が即時出張による修復(無償)</td></tr><tr><td>サービス時間</td><td>平日8:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)</td></tr><tr><td>対象製品</td><td>BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)</td></tr></table> <p>*1 使用期間により寿命となる有寿命部品についての交換は有償となります。 *2 BladeSymphony 専用外付けオプションに関しては、無償保証期間はご購入日より1 年間となります。</p>	無償 保証 期間	ご購入日より1 年間 *1	サービス内容	障害時サービス員が即時出張による修復(無償)	サービス時間	平日 8:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)	対象製品	BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)
無償 保証 期間	ご購入日より1 年間 *1								
サービス内容	障害時サービス員が即時出張による修復(無償)								
サービス時間	平日 8:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)								
対象製品	BladeSymphony システムおよび内蔵オプション *2 (OS およびソフトウェア製品は対象外)								

誤	<ul style="list-style-type: none">□ サポートサービスの種類<ul style="list-style-type: none">■ 契約保守 あらかじめお客様とお買い求め先の間で「保守契約」を結び、製品にトラブルが発生した場合にサポートサービスを行います。■ パーコール保守 何らかの事情で、上記の保守契約を結んでいないお客様からの修理依頼を受け、サポートサービスを行います。
正	<ul style="list-style-type: none">□ 保守サービスの種類<ul style="list-style-type: none">■ 契約保守 あらかじめお客様とお買い求め先の間で「保守契約」を結び、製品にトラブルが発生した場合にサポートサービスを行います。■ パーコール保守 何らかの事情で、上記の保守契約を結んでいないお客様からの修理依頼を受け、サポートサービスを行います。

誤	<ul style="list-style-type: none">□ 有償サポートについて<p>BladeSymphony では、ハードウェアやソフトウェアに関する操作方法、動作に関する各種問合せは、原則有償サポートのみでの対応となります。</p><ul style="list-style-type: none">■ ハードウェアサポートサービス 無償保証期間以降について、お客様のニーズに合わせて、次のサポートサービスをご用意しております。<ul style="list-style-type: none">■ BladeSymphony ハードウェア維持保守ベーシックサポートサービス 年契約(定額)で障害時サービス員が即時出張による修理を行うサービスです。 サービス時間 平日 8:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)
正	<ul style="list-style-type: none">□ 有償サポートについて<p>BladeSymphony では、ハードウェアやソフトウェアに関する操作方法、動作に関する各種問合せは、原則有償サポートのみでの対応となります。</p><p>■ ハードウェアサポートサービス</p><p>無償保証期間以降について、お客様のニーズに合わせて、次のサポートサービスをご用意しております。</p><ul style="list-style-type: none">■ BladeSymphony ハードウェア 維持保守ベーシックサポートサービス 年契約(定額)で障害時サービス員が即時出張による修理を行うサービスです。 サービス時間 平日 8:00 ~ 19:00 (土曜・日曜・祝日・年末年始を除く) または 24時間週7日

・「はじめに」 「ハードウェアサポートサービス」 (P.xii)

誤	<ul style="list-style-type: none"> ■ ソフトウェアサポートサービス BladeSymphony を安心して継続的にご利用いただくためには、ソフトウェアのサポートサービスが必要です。ソフトウェア利用上のご質問や万が一のトラブルへの対応など、必要に応じたさまざまなサポートサービスをご用意しております。詳細につきましてはソフトウェアサポートサービスのホームページにてご紹介しております。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページアドレス http://www.hitachi.co.jp/Prod/comp/soft1/service/index.html <p>□ サポートサービス期間について サポートサービス期間は、製品の納入時より 5 年間です。</p>
正	<p>■ ソフトウェアサポートサービス BladeSymphony を安心して継続的にご利用いただくためには、ソフトウェアのサポートサービスが必要です。ソフトウェア利用上のご質問や万が一のトラブルへの対応など、必要に応じたさまざまなサポートサービスをご用意しております。詳細につきましてはソフトウェアサポートサービスのホームページにてご紹介しております。 ・ ホームページアドレス http://www.hitachi.co.jp/Prod/comp/soft1/service/index.html</p> <p>□ 保守サービス期間について 保守サービス期間は、製品の納入時より 5 年間です。</p>

・「はじめに」 「ハードウェアサポートサービス」 (P.xii)

追加	「ロングライフサポートサービスについて」の項目のあとに下記項目を追加
<h2 style="color: #008080;">サポートサービス</h2> <p>BladeSymphony を安心して継続的にご利用いただくためには、サポートサービスのご契約を推奨します。サポートサービスでは対象製品に関するお客様の問題解決支援、対象製品の改良版の提供、対象製品に関する有用な情報提供を行っています。サポートサービスの詳細につきましては、次のHP でご紹介しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページアドレス http://www.hitachi.co.jp/Prod/comp/soft1/symphony/index.html 	

・「8 HVM について」 「HVM 概要と基本操作」 「HVM 製品仕様」 (P.618)

誤	表 7-6 Xeon 版 HVM の機能一覧				
	#	項目	仕様 ^{※1}		
			54-xx	55-xx	56-xx
	3	サポート ゲスト OS	:		
		Windows Server 2008 R2	x		○ ^{※14}
正	表 7-6 Xeon 版 HVM の機能一覧				
	#	項目	仕様 ^{※1}		
			54-xx	55-xx	56-xx
	3	サポート ゲスト OS	:		
		Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.9	x		○ ^{※17}
		:	:		
		Windows Server 2008 R2	x		○ ^{※16}
		Windows Server 2008 R2 SP1	x		○ ^{※16}
	<p>※15 56-26 以降サポートします。</p> <p>※16 56-28 以降サポートします。</p> <p>※17 56-30 以降サポートします。セットアップ方法については、「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.9 ご使用の手引き」を参照してください。</p>				

誤

❑ 仮想NIC の使用にあたっての注意事項

- Linux の場合
OS コンソール (ゲストスクリーン) から次のコマンドを実行します。
ethtool -K ethx rx off tx off tso off (HVM ファームウェアバージョン 54-02 以前)
ethtool -K ethx rx off tx on tso on (HVM ファームウェアバージョン 54-03 以降)
(ethx には仮想NIC のインタフェース名が入ります。例 eth0)

ethtool コマンドによる設定は、OS のシャットダウンで無効になってしまいます。
したがって、OS ブート毎に設定が必要となりますので、OS ブート時に実行される
スクリプト (/etc/rc.d/rc.local) などへのコマンド追加を推奨します。

正

❑ 仮想NIC の使用にあたっての注意事項

- Linux の場合
 - 1 /etc/modprobe.conf ファイルにドライバのオプションを記述することにより、ドライバロード時に TCP Checksum Offload 機能 (受信) が設定されます。

/etc/modprobe.conf ファイルの記述例を以下に示します。

(例) eth0 と eth1 の TCP Checksum Offload 機能 (受信) を無効に設定
options e1000 XsumRX=0,0
上記の値が 0 の場合は無効、1 の場合は有効に設定されます。上記の数字は、左から eth0、eth1 を示しています。設定する e1000 インタフェース数に合わせてコンマ (,) 区切りで 0 または 1 を記述します。
 - 2 OS コンソール (ゲストスクリーン) から次のコマンドを実行します。
ethtool -K ethx ~~rx off~~ tx off tso off (HVM ファームウェアバージョン 54-02 以前)
ethtool -K ethx ~~rx off~~ tx on tso on (HVM ファームウェアバージョン 54-03 以降)
(ethx には仮想NIC のインタフェース名が入ります。例 eth0)

ethtool コマンドによる設定は、OS のシャットダウンで無効になってしまいます。
したがって、OS ブート毎に設定が必要となりますので、OS ブート時に実行される
スクリプト (/etc/rc.d/rc.local) などへのコマンド追加を推奨します。

- ・「8 HVM について」「ゲスト OS の操作」「Xeon 版ゲスト OS のブート方法」
「LPAR Activate で起動する Pre-boot ファームウェアの選択」(P.689)

誤			
ファームウェア種別	説明	適用	
論理BIOS	BIOSからのブートをサポートしているOSをブートするときに使用する論理BIOSです。	Windows Server 2008以外	
論理BIOS2 *1	BIOSからのブートをサポートしているWindows Server 2008をブートするときに使用する論理BIOSです。	Windows Server 2008	

正			
ファームウェア種別	説明	適用	
論理BIOS	BIOSからのブートをサポートしているOSをブートするときに使用する論理BIOSです。	Red Hat Enterprise Linux Windows Server 2003 Windows Server 2003 R2	
論理BIOS2 *1	BIOSからのブートをサポートしているWindows Server 2008、Windows Server 2008 R2をブートするときに使用する論理BIOSです。	Windows Server 2008 Windows Server 2008 R2	

- ・「8 HVM について」「HVM スクリーン操作」「HVM スクリーン概要」「Logical Partition Configuration」(P.718)

誤				
#	タイトル	正式名称	説明	初期値
⑤	Shr	Shared Processors	LPARに割り当てる共有モードの論理プロセッサ数を設定します。プロセッサ数にはIPF版HVMで1~32まで、Xeon版HVMで1~16まで設定できます。 ※論理プロセッサの数が物理共有プロセッサよりも多いとき、操作が重くなることがあります。	0
⑥	Ded	Dedicated Processors	LPARに割り当てる占有モードの論理プロセッサ数を設定します。プロセッサ数にはIPF版HVMで1~32まで、Xeon版HVMで1~16まで設定できます。	1

正				
#	タイトル	正式名称	説明	初期値
⑤	Shr	Shared Processors	LPARに割り当てる共有モードの論理プロセッサ数を設定します。プロセッサ数にはIPF版HVMで1~32まで、Xeon版HVMで1~16まで設定できます。 ※論理プロセッサの数が物理共有プロセッサよりも多いとき、操作が重くなることがあります。 ※Windows Server 2008 R2を使用する場合は、LPARに割り当てるプロセッサ数を2以上に設定してください。	0
⑥	Ded	Dedicated Processors	LPARに割り当てる占有モードの論理プロセッサ数を設定します。プロセッサ数にはIPF版HVMで1~32まで、Xeon版HVMで1~16まで設定できます。 ※Windows Server 2008 R2を使用する場合は、LPARに割り当てるプロセッサ数を2以上に設定してください。	1


・「8 HVM について」「HVM スクリーン操作」「HVM スクリーン概要」「Logical Partition Configuration」
(P.719)


誤				
#	タイトル	正式名称	説明	初期値
⑮	PB (Xeon版 HVMのみ)	Pre-boot Firmware	Pre-bootファームウェアを指定します。 BIOS : LPARのActivateで論理BIOSを起動します。 BIOS2 : LPARのActivateでWindows Server 2008向けの 論理BIOSを起動します。	BIOS

正				
#	タイトル	正式名称	説明	初期値
⑮	PB (Xeon版 HVMのみ)	Pre-boot Firmware	Pre-bootファームウェアを指定します。 BIOS : LPARのActivateで論理BIOSを起動します。 BIOS2 : LPARのActivateでWindows Server 2008、 Windows Server 2008 R2 向けの論理BIOSを 起動します。	BIOS

・「8 HVM について」「HVM スクリーン操作」「HVM スクリーン概要」「Logical Partition Configuration」
(P.722)

誤	
<p>(5) LPARに割り当てる共有モードの論理プロセッサ数を変更するには？</p> <p>「Logical Partition Configuration」スクリーンを表示します。 共有プロセッサ数を変更するLPAR行のShr列にカーソルを合わせ、[Enter] を押すとプロセッサ数 を選択するサブスクリーンを表示します。希望のプロセッサ数を入力して [Enter] を押してくださ い。共有プロセッサ数は、当該LPARがDeactivate状態のときのみ変更できます。</p>	

正	
<p>(5) LPARに割り当てる共有モードの論理プロセッサ数を変更するには？</p> <p>「Logical Partition Configuration」スクリーンを表示します。 共有プロセッサ数を変更するLPAR行のShr列にカーソルを合わせ、[Enter] を押すとプロセッサ 数を選択するサブスクリーンを表示します。希望のプロセッサ数を入力して [Enter] を押してく ださい。 共有プロセッサ数は、当該LPARがDeactivate状態のときのみ変更できます。</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; background-color: #e0f2f1; padding: 5px; margin-right: 10px; text-align: center;">  制限 </div> <div> <p>Windows Server 2008 R2を使用する場合は、LPAR に割り当てるプロセッサ数を 2 以上に設定してください。</p> </div> </div>	

誤	<p>(6) LPARに割り当てる占有モードの論理プロセッサ数を変更するには？</p> <p>「Logical Partition Configuration」スクリーンを表示します。 占有プロセッサ数を変更するLPAR行のDed列にカーソルを合わせ、[Enter] を押すとプロセッサ数を選択するサブスクリーンを表示します。希望のプロセッサ数を入力して [Enter] を押してください。占有プロセッサ数は、当該LPARがDeactivate状態のときのみ変更できます。</p>
正	<p>(6) LPARに割り当てる占有モードの論理プロセッサ数を変更するには？</p> <p>「Logical Partition Configuration」スクリーンを表示します。 占有プロセッサ数を変更するLPAR行のDed列にカーソルを合わせ、[Enter] を押すとプロセッサ数を選択するサブスクリーンを表示します。希望のプロセッサ数を入力して [Enter] を押してください。占有プロセッサ数は、当該LPARがDeactivate状態のときのみ変更できます。</p> <p> 制限 Windows Server 2008 R2 を使用する場合は、LPAR に割り当てるプロセッサ数を 2 以上に設定してください。</p>

誤

#	タイトル	ゲストの状態			備考
		Activate	Deactivate	Failure	
①	HVM ID	x	o	x	
②	HVM IP Address	x	x	x	
③	Subnet Mask	x	o	o	
④	Default Gateway	x	o	o	
⑤	SVP IP Address	x	o	o	
⑥	BSM1~4 IP Address	x	o	o	
⑦	BSM1~4 Alert Port	x	o	o	
⑧	Management Path	x	o	x	
⑨	VNIC System No	x	o	x	
⑩	Alert Language	x	o	o	
⑪	Virtual Console Port	x	o	x	
⑫	Connect	x	x	x	表示のみ
⑬	Link	x	x	x	表示のみ
⑭	Port#	x	x	x	表示のみ



o:変更可能、x:変更不可

正

#	タイトル	ゲストの状態			備考
		Activate	Deactivate	Failure	
①	HVM ID	x	o	x	
②	HVM IP Address	x	x	x	
③	Subnet Mask	x	o	o	
④	Default Gateway	x	o	o	
⑤	SVP IP Address	x	o	o	
⑥	BSM1~4 IP Address	HVM ファームウェアバージョン 56-26 以前			
		x	o	o	
		HVM ファームウェアバージョン 56-27 以降			
⑦	BSM1~4 Alert Port	HVM ファームウェアバージョン 56-26 以前			
		x	o	o	
		HVM ファームウェアバージョン 56-27 以降			
		o	o	o	
⑧	Management Path	x	o	x	
⑨	VNIC System No	x	o	x	
⑩	Alert Language	x	o	o	
⑪	Virtual Console Port	x	o	x	
⑫	Connect	x	x	x	表示のみ
⑬	Link	x	x	x	表示のみ
⑭	Port#	x	x	x	表示のみ

o:変更可能、x:変更不可

誤	<p>(5) ServerConductor/Blade Server Manager(BSM) IP Addressを設定するには？ 「System Configuration」スクリーンを表示します。 BSM IP Addressにカーソルを合わせて[Enter]を押してサブスクリーンを表示します。変更したい System Manager IP Addressを入力して[Enter]を押してください。</p> <p>(6) ServerConductor/Blade Server Manager(BSM) Alert Portを設定するには？ 「System Configuration」スクリーンを表示します。 BSM Alert Portにカーソルを合わせて[Enter]を押してサブスクリーンを表示します。変更したい System Manager Alert Portを入力して[Enter]を押してください。</p>
正	<p>(5) ServerConductor/Blade Server Manager(BSM) IP Addressを設定するには？ 「System Configuration」スクリーンを表示します。 BSM IP Addressにカーソルを合わせて[Enter]を押してサブスクリーンを表示します。変更したい System Manager IP Addressを入力して[Enter]を押してください。</p> <p>… 補足</p> <p>■ HVM ファームウェアバージョン 56-27 以降は、変更内容を反映するのに [F10] (Update System Config)による操作は不要です。 なお、変更内容が反映されるのに 10 秒程度かかる場合があります。</p> <p>(6) ServerConductor/Blade Server Manager(BSM) Alert Portを設定するには？ 「System Configuration」スクリーンを表示します。 BSM Alert Portにカーソルを合わせて[Enter]を押してサブスクリーンを表示します。変更したい System Manager Alert Portを入力して[Enter]を押してください。</p> <p>… 補足</p> <p>■ HVM ファームウェアバージョン 56-27 以降は、変更内容を反映するのに [F10] (Update System Config)による操作は不要です。 なお、変更内容が反映されるのに 10 秒程度かかる場合があります。</p>

誤	<p> 補足</p> <p>LAN コントローラーの MAC アドレスを変更する場合は、できるだけゲスト OS 上でデバイスドライバの機能を使用してください。 HVM を使った MAC アドレスの変更は、VNICSystemNo.の制限を越える 129 台以上の HVM システムを運用する場合を除き、推奨しません。MAC アドレスを変更する場合には、ネットワーク上に同一 MAC アドレスのポートが存在しないことを確認してください。もし、同一 MAC アドレスが存在した場合、ネットワークに重大な障害を引き起こす場合があります。</p>
正	<p> 制限</p> <p>LAN コントローラーの MAC アドレスを変更する場合は、できるだけゲスト OS 上でデバイスドライバの機能を使用してください。HVM を使った MAC アドレスの変更は、VNICSystemNo.の制限を越える 129 台以上の HVM システムを運用する場合を除き、推奨しません。MAC アドレスの変更は推奨しません。万一、 MAC アドレスを変更する場合には、ネットワーク上に同一 MAC アドレスのポートが存在しないことを確認してください。もし、同一 MAC アドレスが存在した場合、ネットワークに重大な障害を引き起こす場合があります。</p>

誤	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">LPAR 間通信 パケットフィルタ</th> <th colspan="2">LPAR 間通信パケット</th> <th rowspan="2">外部通信 パケット</th> </tr> <tr> <th>HVM 内部</th> <th>HVM 外部</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Disable</td> <td>送信する</td> <td>送信しない</td> <td>送信する</td> </tr> <tr> <td>Enable</td> <td>送信しない</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> </tr> <tr> <td>Disable(ALL)</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> </tr> </tbody> </table>	LPAR 間通信 パケットフィルタ	LPAR 間通信パケット		外部通信 パケット	HVM 内部	HVM 外部	Disable	送信する	送信しない	送信する	Enable	送信しない	送信する	送信する	Disable(ALL)	送信する	送信する	送信する				
LPAR 間通信 パケットフィルタ	LPAR 間通信パケット		外部通信 パケット																				
	HVM 内部	HVM 外部																					
Disable	送信する	送信しない	送信する																				
Enable	送信しない	送信する	送信する																				
Disable(ALL)	送信する	送信する	送信する																				
正	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">LPAR 間通信 パケットフィルタ</th> <th colspan="2">LPAR 間通信パケット</th> <th rowspan="2">外部通信 パケット</th> <th rowspan="2">用途</th> </tr> <tr> <th>HVM 内部</th> <th>HVM 外部</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Disable</td> <td>送信する</td> <td>送信しない</td> <td>送信する</td> <td>同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 HVM 内部に限定した LPAR 間通信を行う場合に使用します。</td> </tr> <tr> <td>Enable</td> <td>送信しない</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> <td>同一セグメントの LPAR 間通信を禁止します。 各 LPAR が別々の所有者など、LPAR の独立性とセキュリティを高める場合に使用します。</td> </tr> <tr> <td>Disable(ALL)</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> <td>送信する</td> <td>同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 bonding、hbonding 等のネットワーク冗長化構成を使用して、LPAR 間通信を行う場合に使用します。</td> </tr> </tbody> </table>	LPAR 間通信 パケットフィルタ	LPAR 間通信パケット		外部通信 パケット	用途	HVM 内部	HVM 外部	Disable	送信する	送信しない	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 HVM 内部に限定した LPAR 間通信を行う場合に使用します。	Enable	送信しない	送信する	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を禁止します。 各 LPAR が別々の所有者など、LPAR の独立性とセキュリティを高める場合に使用します。	Disable(ALL)	送信する	送信する	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 bonding、hbonding 等のネットワーク冗長化構成を使用して、LPAR 間通信を行う場合に使用します。
LPAR 間通信 パケットフィルタ	LPAR 間通信パケット		外部通信 パケット	用途																			
	HVM 内部	HVM 外部																					
Disable	送信する	送信しない	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 HVM 内部に限定した LPAR 間通信を行う場合に使用します。																			
Enable	送信しない	送信する	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を禁止します。 各 LPAR が別々の所有者など、LPAR の独立性とセキュリティを高める場合に使用します。																			
Disable(ALL)	送信する	送信する	送信する	同一セグメントの LPAR 間通信を許可します。 bonding、hbonding 等のネットワーク冗長化構成を使用して、LPAR 間通信を行う場合に使用します。																			

誤	<p>[Linuxを使用する場合]</p> <p>次の設定を行ってください。</p> <ol style="list-style-type: none">1 /boot/grub/grub.confの設定 ① splashimage=(hd0,0)/grug/splash.xpm.gz行をコメントアウト
正	<p>[Linuxを使用する場合]</p> <p>次の設定を行ってください。</p> <ol style="list-style-type: none">1 /boot/grub/grub.confの設定 ① splashimage=(hd0,0)/grub/splash.xpm.gz行をコメントアウト

誤	<h2>LPARモードでのLinuxタイマモードについて</h2> <p>(中略)</p> <p>(2) Linux 5.4を使用する場合</p> <p>/boot/grub/grub.confのkernel行にclock=tsccountを追加してください。 (変更前)</p> <pre>kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=/dev/VolGroup00/LogVol00</pre> <p>(変更後)</p> <pre>kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=/dev/VolGroup00/LogVol00 clock=hpet</pre>
正	<h2>LPARモードでのLinuxタイマモードについて</h2> <p>(中略)</p> <p>(2) Linux 5.4を使用する場合</p> <p>/boot/grub/grub.confのkernel行にclock=tsccountを追加してください。 (変更前)</p> <pre>kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=/dev/VolGroup00/LogVol00</pre> <p>(変更後)</p> <pre>kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=/dev/VolGroup00/LogVol00 clock=tsccount</pre>

・「8 HVM について」「注意事項」「Windows Server 2008 使用時の注意について」(P.900)

追加

Windows Server 2008使用時の注意について

(中略)

- Windows Server 2008 R2を使用する場合は、LPARに割り当てるプロセッサ数を2以上に設定してください。

・「8 HVM について」「注意事項」(P.908)

追加

HVM起動時の前提条件について

- HVMを起動するためには、以下のリソースが必要になります。以下の前提条件を満たしていない場合、HVMが起動できません。

項目	前提条件		
プロセッサ数	2 つ以上		
メモリサイズ	HVM	1280MB 以上	
	LPAR	Windows Server 2003	:256MB 以上
		Windows Server 2008	:512MB 以上
Red Hat Enterprise Linux	:512MB 以上		

・「8 HVM について」「注意事項」(P.908)

追加

プロセッサキャッピングについて

- HVMファームウェアバージョンが56-27以前の場合、プロセッサキャッピングが有効のLPARが定義されているHVMを再起動後、プロセッサキャッピングが有効となっているにもかかわらず、本機能が動作しません。
そのため、HVMを再起動後、プロセッサキャッピングを有効に再設定してください。

■ ソフトウェアガイド

・「7 インテル Itanium 2 プロセッサ搭載サーバブレード Windows Server 2003 (Itanium) 編」
「電源を入れる／切る」「はじめて電源を入れる」「設定環境の準備」(P.379)

誤

■ RDP 端末

サーバブレードのWindows にリモートデスクトップ接続を行うための端末を示します。
RDP 端末は、サービスLAN ポートと通信できる環境にあり、Remote Desktop Connection Software が動作するWindows マシンとします。
Remote Desktop Connection Software (リモートデスクトップ接続) プログラムの本体は、mstsc.exe という実行ファイルです。管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、/console オプションをつけてアプリケーションを起動してください。

```
mstsc.exe /console
```

またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、RDP 端末がWindows 2000 の場合、OS 標準のmstsc.exe を使用するのではなく、下記Webページからダウンロードしたものを使用してください。

```
http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.msp
```

補足

上記はあくまでも説明のための例です。上記ではSVP 端末、RDP 端末を別マシンとしていますが、1台のマシンにtelnet クライアントソフトウェア、Remote Desktop Client Software をインストールし、ネットワークケーブルをつなぎ変えて設定作業を行う、といったことも可能です。

正

■ RDP 端末

サーバブレードのWindows にリモートデスクトップ接続を行うための端末を示します。
RDP 端末は、サービスLAN ポートと通信できる環境にあり、Remote Desktop Connection Software が動作するWindows マシンとします。
Remote Desktop Connection Software (リモートデスクトップ接続) プログラムの本体は、mstsc.exe という実行ファイルです。管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、/console (または/admin)オプションをつけてアプリケーションを起動してください。

```
mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)
```

またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、RDP 端末がWindows 2000 の場合、OS 標準のmstsc.exe を使用するのではなく、下記Webページからダウンロードしたものを使用してください。

```
http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.msp
```

補足

- 上記はあくまでも説明のための例です。上記ではSVP 端末、RDP 端末を別マシンとしていますが、1台のマシンにtelnet クライアントソフトウェア、Remote Desktop Client Software をインストールし、ネットワークケーブルをつなぎ変えて設定作業を行う、といったことも可能です。
- [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)コマンド以外で起動した場合(例えば スタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindows の一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ず mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin) コマンドを実行して [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。
- ご使用になっている“ リモートデスクトップ接続アプリケーション (mstsc.exe)”のバージョンにより使用するオプションが/consoleなのか、/adminなのか異なります。コマンドラインより mstsc.exe /?を実行し、ヘルプを参照してどちらのオプションが使用できるか確認してください。

誤

17 RDP 端末で、[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを実行する。

[スタート] → [ファイル名を指定して実行] を選択して、次のコマンドを実行します。

mstsc.exe /console

接続先に、先ほどSVP 端末から設定したIP アドレス(この例では、192.168.0.10)を指定します。



補足

[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console コマンド以外で起動した場合(例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindows の一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe /console コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。

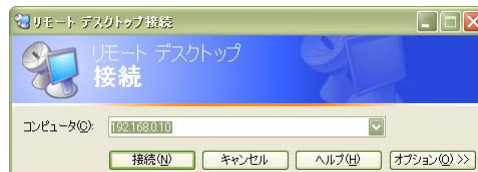
正

17 RDP 端末で、[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを実行する。

[スタート] → [ファイル名を指定して実行] を選択して、次のコマンドを実行します。

mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)

接続先に、先ほどSVP 端末から設定したIP アドレス(この例では、192.168.0.10)を指定します。



補足

- [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console (またはmstsc.exe/admin) コマンド以外で起動した場合(例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindows の一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe /console(またはmstsc.exe /admin) コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。
- ご使用になっている“ リモートデスクトップ接続アプリケーション (mstsc.exe)”のバージョンにより使用するオプションが/consoleなのか、/adminなのか異なります。コマンドラインよりmstsc.exe /?を実行し、ヘルプを参照してどちらのオプションが使用できるか確認してください。



- ・「7 インテル Itanium 2 プロセッサ搭載サーバブレード Windows Server 2003 (Itanium) 編」
「電源を入れる／切る」「日常、電源を入れる」(P.388)

誤	3 OS が起動するまで待ち、「はじめて電源を入れる」と同様に、RDP 端末で[リモートデスクトップ接続] アプリケーションをmstsc.exe /console コマンドで起動し、サーバブレードにリモートデスクトップ接続する。
正	3 OS が起動するまで待ち、「はじめて電源を入れる」と同様に、RDP 端末で[リモートデスクトップ接続] アプリケーションをmstsc.exe /console (またはmstsc /admin) コマンドで起動し、サーバブレードにリモートデスクトップ接続する。



- ・「7 インテル Itanium 2 プロセッサ搭載サーバブレード Windows Server 2003 (Itanium) 編」
「Windows Server 2003 (Itanium) 使用上の制限」「リモートデスクトップ接続」(P.426)

誤	<p>□ リモートデスクトップ接続</p> <p>管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe) を、/console オプションをつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console</p> <p>またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、リモートデスクトップ接続のクライアントOS がWindows 2000 の場合、OS 標準のmstsc.exe を使用するのではなく、下記Web ページから最新版をダウンロードして使用してください。</p> <p style="text-align: center;">http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.mspx</p>
正	<p>□ リモートデスクトップ接続</p> <p>管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe) を、/console オプション(または/adminオプション)をつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)</p> <p>またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、リモートデスクトップ接続のクライアントOS がWindows 2000 の場合、OS 標準のmstsc.exe を使用するのではなく、下記Web ページから最新版をダウンロードして使用してください。</p> <p style="text-align: center;">http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.mspx</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">● ● ● 補足</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ■ [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console (またはmstsc.exe/admin) コマンド以外で起動した場合(例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindows の一部の機能が使えない場合があります。 管理者は必ずmstsc.exe /console(またはmstsc.exe /admin) コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。 ■ 使用になっている“ リモートデスクトップ接続アプリケーション (mstsc.exe)”のバージョンにより使用するオプションが/console (mstsc.exe)のバージョンにより使用するオプションが/consoleなのか、/adminなのか異なります。コマンドラインより mstsc.exe /? を実行し、ヘルプを参照してどちらのオプションが使用できるか確認してください。

- ・「7 インテル Itanium 2 プロセッサ搭載サーバブレード Windows Server 2003 (Itanium) 編」
「Windows Server 2003 (Itanium) のセットアップ」「Windows Server 2003 (Itanium) セットアップの詳細」
「『SystemInstaller』を使用したセットアップ」 (P.456)

誤	<p>32 以降、「はじめて電源を入れる」P.378 と同じ手順で、リモートデスクトップ接続を行い、使用する環境に合わせ設定を行う。</p> <p> 管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe)を、/console オプションをつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console</p> <p>詳細は、「リモートデスクトップ接続」P.426 を参照してください。</p>
正	<p>32 以降、「はじめて電源を入れる」P.378 と同じ手順で、リモートデスクトップ接続を行い、使用する環境に合わせ設定を行う。</p> <p> 管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe)を、/console オプション (または/adminオプション)をつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)</p> <p>詳細は、「リモートデスクトップ接続」P.426 を参照してください。</p>

- ・「7 インテル Itanium 2 プロセッサ搭載サーバブレード Windows Server 2003 (Itanium) 編」
「Windows Server 2003 (Itanium) のセットアップ」「Windows Server 2003 (Itanium) セットアップの詳細」
「『SystemInstaller』を使用したセットアップ」 (P.457)

誤	<p style="text-align: center;">SystemInstaller 構成マネージャ</p> <p> ■ 管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe)を、/console オプションをつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console</p> <p>詳細は、「リモートデスクトップ接続」P.426 を参照してください。</p> <p>■ A7xA2モデルでも画面にA6xA2と表示される場合がありますが、A7xA2 に読み替えてご使用ください。</p>
正	<p style="text-align: center;">SystemInstaller 構成マネージャ</p> <p> ■ 管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、必ずリモートデスクトップ接続のクライアント側アプリケーション(mstsc.exe)を、/console オプション (または/adminオプション)をつけて起動してください。</p> <p style="text-align: center;">mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)</p> <p>詳細は、「リモートデスクトップ接続」P.426 を参照してください。</p> <p>■ A7xA2モデルでも画面にA6xA2と表示される場合がありますが、A7xA2 に読み替えてご使用ください。</p>

誤

- 2) LPAR 上で動作するWindows Server 2003 へ、リモートデスクトップ接続するための操作端末(RDP 端末)
LPAR には表示デバイスが存在しないため、OS セットアップ後、Windows のリモートデスクトップ接続や、リモートデスクトップ機能を実現するアプリケーションで接続し、Windows を操作する必要があります。そのための作業端末をRDP 端末と記載することとします。Windows のリモートデスクトップ機能で接続する場合は、Remote Desktop Connection Software(リモートデスクトップ接続)をRDP 端末で使用する必要があります。プログラム本体は、mstsc.exe という実行ファイルです。管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、/console オプションをつけてアプリケーションを起動してください。

mstsc.exe /console

またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、RDP 端末のOS がWindows 2000 の場合、OS 標準の mstsc.exe を使用するのではなく、下記Web ページからダウンロードしたものを使用してください。

<http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.msp>

正

- 2) LPAR 上で動作するWindows Server 2003 へ、リモートデスクトップ接続するための操作端末(RDP 端末)
LPAR には表示デバイスが存在しないため、OS セットアップ後、Windows のリモートデスクトップ接続や、リモートデスクトップ機能を実現するアプリケーションで接続し、Windows を操作する必要があります。そのための作業端末をRDP 端末と記載することとします。Windows のリモートデスクトップ機能で接続する場合は、Remote Desktop Connection Software(リモートデスクトップ接続)をRDP 端末で使用する必要があります。プログラム本体は、mstsc.exe という実行ファイルです。管理者としてリモートデスクトップ接続を行う場合、/console オプション(または/adminオプション)をつけてアプリケーションを起動してください。

mstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)

またMicrosoft 社のWeb サイトから最新版を入手することもできます。詳細は下記Web ページを参照願います。また、RDP 端末のOS がWindows 2000 の場合、OS 標準の mstsc.exe を使用するのではなく、下記Web ページからダウンロードしたものを使用してください。

<http://www.microsoft.com/windowsxp/downloads/tools/rdclientdl.msp>

誤

なお、Windows Server 2003 のリモートデスクトップ接続を行う場合、RDP 端末で[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。起動方法は、スタートメニューのショートカットからではなく、以下のようにコマンドラインから/console オプションを必ず付けて起動してください。

```
mstsc.exe /console
```

補足

[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe / console コマンド以外で起動した場合 (例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindowsの一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe / console コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。

リモートデスクトップ接続ができないブート中などは、シリアルコンソール(テキストベースの管理コンソール)が使用できます。Windows Server 2003 が用意するシリアルコンソール用インタフェースはSAC(Special Administration Console) と呼ばれます。注意事項や詳細については、**「SAC(Special Administration Console) のコマンドについて」P.530** を参照してください。

LPAR に割当ててられたシリアルコンソールを使用するには、SVP 端末でSVP に接続し、HVM 管理画面から該当LPAR のコンソール画面に切替える必要があります。詳細は『ユーザーズガイド』-第8章「HVM について」を参照してください。

正

なお、Windows Server 2003 のリモートデスクトップ接続を行う場合、RDP 端末で[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。起動方法は、スタートメニューのショートカットからではなく、以下のようにコマンドラインから/console オプション(またはadmin オプション)を必ず付けて起動してください。

```
mstsc.exe /console(またはmstsc.exe /admin)
```

補足

- [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console (またはmstsc.exe/admin)コマンド以外で起動した場合 (例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindowsの一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe /console (またはmstsc.exe /admin)コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。
 - **ご使用になっている「リモートデスクトップ接続アプリケーション」(mstsc.exe) のバージョンにより使用するオプションが/consoleなのか、/adminなのか異なります。コマンドラインよりmstsc.exe /?を実行し、ヘルプを参照してどちらのオプションが使用できるか確認してください。**
 - リモートデスクトップ接続ができないブート中などは、シリアルコンソール(テキストベースの管理コンソール)が使用できます。Windows Server 2003 が用意するシリアルコンソール用インタフェースはSAC(Special Administration Console) と呼ばれます。注意事項や詳細については、**「SAC(Special Administration Console) のコマンドについて」P.530** を参照してください。
- LPAR に割当ててられたシリアルコンソールを使用するには、SVP 端末で SVP に接続し、HVM 管理画面から該当LPAR のコンソール画面に切替える必要があります。詳細は『ユーザーズガイド』-第8章「HVM について」を参照してください。

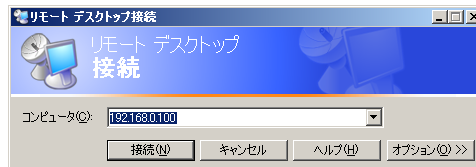
誤

56 RDP 端末で、[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを実行する。

[スタート] → [ファイル名を指定して実行] を選択して、次のコマンドを実行します。

mstsc.exe /console

接続先に、先ほどSVP 端末から設定したIP アドレス(この例では、192.168.0.100)
を指定してください。



[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe / console コマンド以外で起動した場合(例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindowsの一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe / console コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。

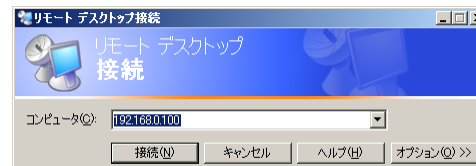
正

56 RDP 端末で、[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを実行する。

[スタート] → [ファイル名を指定して実行] を選択して、次のコマンドを実行します。

mstsc.exe /console **(またはmstsc.exe /admin)**

接続先に、先ほどSVP 端末から設定したIP アドレス(この例では、192.168.0.100)
を指定してください。



補足

- [リモートデスクトップ接続] アプリケーションを、mstsc.exe /console **(またはmstsc.exe/admin)** コマンド以外で起動した場合(例えばスタートメニューのアイコンから起動など)、リモートデスクトップ接続したWindowsの一部の機能が使えない場合があります。管理者は必ずmstsc.exe /console**(またはmstsc.exe /admin)** コマンドを実行して[リモートデスクトップ接続] アプリケーションを起動してください。
- ご使用になっている“ リモートデスクトップ接続アプリケーション (mstsc.exe)”のバージョンにより使用するオプションが/consoleなのか、/adminなのか異なります。コマンドラインよりmstsc.exe /?を実行し、ヘルプを参照してどちらのオプションが使用できるか確認してください。